「お前、これから出かけるのか。もう夜中だぞ？」
「友達と会うのよ。明日学校休みだし」
「またか？ 最近よく出かけるな」
「いいでしょ、別に」
「……」
　本当に、ただそれだけなのだろうか。
　親としては子を信じたいのは山々なのだが、あまりにも疑わしすぎる。
　服装は露出が多めでホステスか何かかと思うようなものだし、化粧も濃いめにしているようだ。
　そんな格好で、女友達と会うだけだと言われても少々信じがたいものがあった。
　もしそれが本当だとしても、一体どこで何をして遊ぶ気だという話だ。
　突っ込んで尋ねたところで正直に答えるとも思えないが、今日はひとつ強引にでも、はっきりと確かめておこうと心を決める。
「……美冴」
「何よ。いい加減に……」
　出かけようとしていた娘が足を止めて、面倒そうに顔をしかめながら振り返る。
　私はその目の前にすかさず手をかざして、呪文を高速詠唱した。
「《催眠紋様（ヒュプノティック・パターン）》」
　かざした掌の前でとらえがたい色彩の絡み合った光がちかちかと明滅し、それを凝視した娘の目がたちまち虚ろになっていく。
「……う……ぁ……？」
「ふぅ」
　うまくいったのを確認すると、もはやまともな意識を保っていない娘に対して説明する。
「小さい頃に、何度か教えてあげたことがあっただろう？ パパは魔法使いなんだよ」
　年頃になった今では、美冴ももうそんな『与太話』は信じていないようだったが、それは事実なのだ。
　そうなるに至った経緯、若い頃の事故や異世界への転移、そこでの冒険行から帰還に至るまでの流れなどはまあ、話せば長いしあまり他人には教えたくないようなことも多々あったので、娘にも詳細に聞かせてやったことまではないのだが。

「さあ。お前はもう、パパの言葉には逆らえない。聞かれたことにはすべて、素直に、正直に答えなさい」
「……うん……」
　催眠状態の娘は、こくりと頷いた。
「お前がこんな時間に出かけるのは、本当に友達と会うためかい？」
「ちがう……」
「じゃあ、何のために？」
　私がそう言うと、彼女は小さく呟いた。
「デートとか……するため……」
「……そうか。やはりな」
　最近の彼女の様子から考えて、そんなことではないかと心配していたのだ。
　やたらと露出の多い服を着るようになったし、髪を染めたり、化粧やアクセサリーにも気を遣うようになった。
　それにしても、父親に嘘をついて男と密会しようだなどとは。
「それで、お前のその恋人というのは誰なんだ？」
　美冴はぼんやりとした表情のまま、首を横に振った。
「恋人じゃない……セフレだよ」
「……なんだと？」
「ネットで知り合った人……援交ってやつ。私よりだいぶ年上だけど、私みたいな女の子が好きで、お金くれるっていうから……」
「……！！」
　私はかあっと、頭に血が上った。

（中略）

「なんかミサって、最近変わったよねー」
　友達のミナ、巳奈子がそんなことを言ってきたので、私は首を傾げた。
「そう？　どこが？」
「なんか格好がダサいっていうか、地味になったじゃん」
　確かに、最近は少し前にはよく着ていたやたらと露出の多い服はみんな捨てて、髪も元の色に戻したし、化粧やアクセサリーも控えめにしているけれど。
「別に、私は変わってないわ。少し前までが、ちょっとおかしかっただけよ」
　そうだ、あの頃の私はおかしかったのだ。
　パパに捧げるべきこの体を他の人に見せびらかして、男漁りをするなんて、どうかしていた。
　今になって思うと、恥ずかしさのあまり顔から火が出そうになる。
　どこの馬の骨とも知れない雄の手がこの肌を這い回ったと思うだけで、おぞましさのあまり鳥肌が立ち、吐き気がしてくるほどだ。
（でも、それも終わったわ）
　もうあんな下品なことはやめて、今後はパパのために尽くすことに決めたんだもの。
　他の男なんてどうでもいいわ。

（中略）

「うん、うまいな」
　いい香りのするベーコンエッグを口に運んで、私は顔を綻ばせた。
　とろりと半熟の部分が残る絶妙な焼き加減だ。
　卵の味を引き立てる塩気もいい具合で、ベーコンにも火が通り過ぎず、脂が舌の上でとろけるような味わいがある。
　ベーコンエッグと言えば朝食のイメージがあるが、軽めに食べたいときの夕食としても悪くはない。
（美冴はまた、料理の腕を上げたようだな）
　まあ、それは当然のことだろう。
　好きこそものの上手なれと、昔からよく言われる。
　私のために奉仕することだけが趣味であり喜びであり生き甲斐であるこの子が、私のために作る料理の腕前を向上させていくのは当たり前のことだ。
　じゅぷ、ぴちゃ、という淫靡な水音と、快い刺激とを食事と共に愉しみながら、私はゆったりとそう考えた。
「そちらの食餌もおいしいかな？」
　そう声をかけながら、一心に私の股間に顔を埋める娘の頭を撫でてやる。
　娘は、こくこくと頷いた。
「あむ……♡　ふぁぃ……、んっ♡　んむっ♡　んんっ♡」
　口の中にいっぱいに頬張った私のペニスを美味しそうにしゃぶっているその表情は、まさに至福そのものだった。